

「教える育てる道徳教育」指導資料

ふるさととちぎの心

栃木県道徳教育郷土資料集（中学校編）

栃木県教育委員会

栃木県

平成26年3月1日現在



※平成26年4月5日に
栃木市と岩舟町が合併し、
栃木市となる予定

ふるさと とちぎの心

この言葉から、みなさんはどんな心を思い浮かべますか？

この資料集には、栃木県（かみ）に関わりのある「人」や「自然」や「伝統や文化」などを素材にした読み物が紹介されています。

この資料との出会いによって、みなさんはいろいろなことを感じることでしょう。

人間のもつ強さ、気高さ、勇気、温かさ

ふるさとの豊かな自然や生命力

伝統の継承（けいしょう）や文化に対する思い など。

ふるさとは、私たちに大切なことを教えてくれます。そのふるさとに誇り（ほこ）をもち、みなさん一人一人が、夢や目標に向かって、力強く自己実現を（じか）図っていくことができるよう願っています。

目次

1	大いちょうへの思い 希望のあさがおへと続く	1
2	日光の絵師・塗師 吉原昭夫（雅号 北宰）	5
3	オリンピッククへの道	9
4	生きがい ―水害からの再出発―	13
5	心をかたちに	17
6	十七才のキミへ	21
7	「三・一一震災」を経験して	25
8	生命の輝き	29

9	三個の小石 — 僕の田中正造研究 —	33
10	那珂川とともに	37
11	この子たちに輝く場を	41
12	コタンの高橋医師	45
13	「茂中の森」の下草刈り	49
14	あるサッカー選手の決断	53
15	ねずみ観音の思い出	57
	参考資料 「とちぎの子どもたちへの教え　く人として、してはならないこと、すべきこと」	61

― 大いちょうへの思い 希望のあさがおへと続く



みなさんは、宇都宮市役所の近くに立つ、あの大いちょうを知っていますか。この木は、推定樹齡が三百年、高さは三十二メートルあると言われています。宇都宮市のシンボルになっている大いちょうは、市の天然記念物にも指定されています。

一九四五年（昭和二十年）の七月、宇都宮市民にとって大きな意味をもつ出来事が起こります。それは大空襲です。その影響で、宇都宮市は中心市街地の大部分が焼けてしまいました。そのため、大いちょうは黒こげになってしまったのです。しかし、翌年の春になると、この大いちょうから奇跡的に緑の芽が出てきました。この出来事は、戦争で打ちひしがれた人々の心をどれほど勇気付けたことでしょう。それから今日までの長い間、この大いちょうは、平和になった私たちの生活をずっと見守り続けています。

中学校に入学した私は、生徒会で立ち上げた「大いちょうプロジェクト」を知りました。「大いちょうプロジェクト」は、「悲惨な戦争を乗り越えた大いちょうの姿を通して、平和の尊さや生命の大切さをたくさんの人々に伝えていきたい」という目標のもとにつくられたものです。私は大いに興味をもったので、その一員になりました。

一年生のときの私は、実際に空襲を体験した方々からお話を聞いたり、大いちょうからとったぎんなんを発芽させて苗を育てたりしました。始めたばかりだった頃の私は「この活動だけで平和の尊さや生命の大切さを伝えられるのだろうか。」と思いつながら、自分からやってみたいと思う活動がなかなか見付からず、「本当にこれでよいのだろうか。」という気持ちでした。また、同年代やクラスの友達からも、プロジェクトの活動について理解してもらえていないような気もしていました。

そうしている間にも、日に日にいちょうの苗は大きくなっていきました。私は一年間の活動の成果を実感しながらも、さらに活動を広げていくことの必要性を感じていました。

二年生になった私は、期待と不安が入り混じる中、「大いちょうプロジェクト」の活動の中心となって、いちょうの苗を育てていきました。

「よし。」

元気に育ついちょうの苗を見て、私はこの苗を、地域の方々や小学生に配る決心をしました。また、地域の小学校に出掛けて行って、これまで調べてきた宇都宮空襲に関する研究発表を行ったり、宇都宮市で開催された「平和の集い」に参加したりしました。さらには、地元のラジオ番組の取材を受け、私たちの行っている活動をより多くの人に知ってもらうようにも努めていきました。しかしながら、私たちの活動が平和のためになっている確信はあり

ませんでした。ただ、平和のために自分たちも何か役に立ちたい、その一心でした。

そんな中、二〇一一年（平成二十三年）三月十一日、東日本大震災しんさいが起きました。私は、津波つなみで家が流された映像や、避難所ひなんで暮らす人たちの様子がテレビで何度も放映されているのを目にしました。

「被災ひさいされた方々を笑顔えがおにしたい。そして、明日への明るい希望をもってもらいたい。」

「これまでやってきた大いちょうプロジェクトの経験を生かすことで、自分たちができることが何かあるはず……。」

私は、ある夏の朝、家の近所を歩いていたときに、あさがおの花が咲く光景を見て元気付けられた日のことを、ふと、思い出しました。

三年生になった私は、プロジェクトの仲間に、「希望のあさがお運動」という新たな取り組みを提案しました。この運動は、被災された方々にあさがおの苗を配るものです。私は、私と同じように、あさがおの花を見て、被災された方々に少しでも元気になってほしい、心の傷を癒いやしてほしい、と思いました。

福島県南相馬市みなみそうまの中学校をはじめ、たくさんの場所にあさがおの苗を贈り、育ててもらうことにしました。大いちょうの緑の新芽が戦争で傷付いた人々を元気付けたように、「希望のあさがお運動」の取り組みによって、被災されたたくさんの人々の心を元気付けたいと思いました。

「私のところにも一ついただけませんか。」

うれしい知らせが学校に入りました。南相馬市に住む学校医さんからでした。私たちは、早速あさがおの苗を贈りました。

後日、その学校医さんから手紙が届きました。

「病院の入り口には、希望のあさがおがたくさん咲いています。いつも患者さんと美しいあさがおを見ながら、『復興に向かって頑張ろう。』と話し合っています。ありがとうございます。」とつづられていました。私たちのあさがおを学校医さんは大切に育て、きれいな花をたくさん咲かせてくださっていたのです。

「これでよかったんだ。」

平和を願って行ってきた私たちの取り組みは、「いちちょうの苗」に始まり、「あさがおの苗」へと広がっています。それらの苗は確かな根を張り、着実に大きく成長し始めています。私たちの取り組みが今後も広がり、「平和を願う心」と「希望を失わない心」をいつまでも引き継いでいけるように「大いちょうプロジェクト」を続けていきたいと思っています。



2 日光の絵師・塗師 吉原昭夫（雅号 北宰）

② 世界遺産に登録された建造物が栃木県にはある。「日光東照宮・輪王寺・二荒山神社」である。そこには、数々の文化財があり、それらを後世に残すために保存修理にあたっていた人がいた。旧今市市（現日光市）出身の吉原昭夫（雅号・北宰）である。彼は、一九二七年（昭和二年）五月一日に生まれた。

幼少の頃、話すことが得意でなかった昭夫は、何か技術を身に付けなければという父の考えで、七才のときに絵を習うことになった。これが一つの転機となり、それからの昭夫は、ひたすら絵や彫刻に没頭し続けるようになった。

一九五一年（昭和二十六年）「日光二社一寺国宝建造物修理事務所」へ入所し、吉田悟堂に弟子入りしたことがきっかけとなり、昭夫は文化財の彩色修理に携わることになった。悟堂のもとには当時すでに三十八名の彩色部員がいたが、技術的に優れたものをもっていった昭夫は、いきなり先輩部員を差し置き悟堂の助手になった。そのため、先輩からはつらく扱われ、挨拶をしても無視され通しの日々が続いた。

悟堂の昭夫への教育も厳しくつらいものであった。特に、礼儀作法には大変厳しいものがあつた。画室でひびきを崩せば、突然赤い顔をしてすごみのある目を釣り上げ、どなられた。座布団を畳の目にそろえず座つてい

ると、

「そんな座り方をする者には座布団はいらない。」
と立たされもした。一事が万事であった。

「なんでそんなに厳しいのか。そんなに俺が憎らしいのか。嫌いなのか。」
と涙する日々が続いた。

悟堂のもとで修養した十数年の間の中には、師の胸の内も知らず悟堂を恨んだことも、事務所をやめてしまおうと涙ながらに辞表を書いたことも度々あった。

悟堂は亡くなる直前、枕元の昭夫に、

「俺が死んでみる、俺のありがたさがわかるから。」

と言った。そばにいた悟堂の妻が、

「吉原さんは他人の子よ。いくらなんでも言い過ぎでしょ。」

その言葉が言い終わらないうちに悟堂は、大きな目を開きのどからしぼり出すような声で、

「吉原は日光の俺のせがれだ。せがれに俺が何を言おうと勝手だ。文句を言うな……。」

これが悟堂の最期の言葉となった。昭夫は、止めどなくこぼれる涙をこらえることができなかった。

「先生、もう何も言わなくてもわかっていきます。」

とつぶやくのが精一杯であった。

それからの昭夫は、常に悟堂の教えを胸に一心不乱に仕事に励んだ。「技術の習得に理論はいらない。生き手本は現存する文化財だ。現物に直にふれ、技を読み取る。気持ちを読み取る。精神を読み取る。学び取るのだ。他人にやれと言われてやるのでは文化財は語ってくれない。」それが、悟堂の教えであった。昭夫の仕事ぶりは何かに取りつかれたようであった。

元来病弱であった昭夫は、「鳴龍」で有名な「本地堂（薬師堂）」修復時には、ぜん息が特にひどくなり、寝込むことが度々あった。病床にあっても修復のことを考え、起きられるようになる、すぐに現場調査に出掛けて行った。ところが、「鳴龍」はすでに火災により焼損していて、そこには無残にも焼けこげた天井があるだけであった。体調が悪い上に手本とすべきものがない。どうすることもできないいらだちに襲われる日々が続いた。そんなとき思い起こされるのが、悟堂の教えであった。昭夫は、絵はがきなどを手がかりに、先人たちの技や気持ちをしたためた数百枚の下絵をかいいたのであった。

修復という仕事は、小さな組織の中で一人一人が自分の分担を責任をもって行わなくてはならない。一か所でも遅れると工程全体が遅れてしまう。体の具合が悪いからといって休んではいられない。周囲の人たちが、昭夫の体を気遣い、止めるのも聞かず仕事場に出掛けることが度々あった。事実、遺作となった「輪王寺護摩堂の天井画大昇龍」制作では、入退院を繰り返しながらの取り組みとなった。これを完成させるために、欠かせ

ない条件があった。陽気のいい気候を選び、一気にかいてしまわなければならないのだ。待ったなしである。昭夫が病身の体を奮い立たせ、仕事に臨んだことは言うまでもなかった。そして、できあがった天井画は、千年先まで剥落の心配はいらないすばらしいものであった。

今、四百年の歳月を経てよみがえる日光二社一寺。昭夫は世界遺産登録の知らせを聞くこともなく、一九九八年（平成十年）十二月三十一日この世を去った。

（注）

- ① 昭夫は壁画等をえがく芸術家、建物等の彩色をする技術者、うるしを塗る技能者であった。文化財建造物彩色選定保存技術保持者として、平成六年文部大臣より認定された。これは、文化財建造物の紋様、彩色の修理復元の技術をもっている人である。
- ② 世界遺産条約に基づき、人類共通の宝物として未来に引き継いでいくべき文化財や遺跡、自然環境として世界遺産委員会に登録された有形の不動産。
- ③ 国宝と重要文化財建造物百二十一棟の保存のため修理をするところ。
- ④ 一九六一年（昭和三十六年）三月焼損。一九六七年（昭和四十二年）三月修復。
- ⑤ 一九九八年（平成十年）七月完成。そこには、文化財復元のための数々の完成された技法が使用されている。

3 オリンピックへの道

私は今、メキシコシティにあるオリンピック競技場のグラウンドに立っている。夢にまで見たオリンピックに出場しているのである。種目は一万メートル、観客たちの声援が聞こえる。日本の国旗もちぎれるほどに激しく動いている。社会人になった一年目、二十三歳のときである。

私は高等学校で、当時駅伝に力を入れていた陸上部に入部した。そこで、監督の先生から、「毎日、練習日誌をつけるように。」

と言われた。陸上部では練習日誌を書くことが伝統になっていた。練習日誌と言われても、いったいどんなことを書けばいいのだろう。不安に思いながら先輩たちに教えてもらって、私も何とか書き始めた。

体調が良いときや納得のいく練習ができたときは、練習日誌を書くことが楽しかった。その反対に調子の悪いときは日誌を書く気持ちにもなれず、サボってしまうことが度々あった。それでも、定期的に先生に提出しなければならなかったので、まとめて書いたりしていた。そんな日々の積み重ねが生かされ、記録は少しずつ伸びていった。

◎六月十八日（火）曇り

◆練習内容

【朝】

○柔軟体操

○八百メートルジョグ

○三千メートルジョグ

【放課後】

○柔軟体操

○補強運動（倒立、その他）

○三千メートルジョグ

○二百メートルインターバル（十本）

○六百メートルインターバル（五本）

○整理体操

◆反省

まだ少し風邪気味ではあるが、あまり練習に影響はなかった。二百メートルのインターバルでは、六本あたりまで疲れを感じなかったが後半の三本は苦しかった。特に最後の百メートルは苦しかった。腕を振ってストライドを伸ばして走ったらなんなく走れた。スピードに自信がついた。

一年生のとき、全国高校駅伝の栃木県予選会を前にして、突然、先生から、

「どうだ鈴木、第一区を走ってみないか。」

と言われた。予想もしなかった先生の言葉に、私はとまどいながらもうなずいた。大会当日、力のありそうな先輩たちに圧倒された私は自信を失いかけていた。そんなとき先生から、

「鈴木、五キロまでついて来い。そこから、俺が伴走で連れて行ってやる。」

と言われ、その言葉だけを信じて五キロまでついて走った。途中で自転車に乗っている先生の姿が見えると、

それまでのつらかったことや苦しかったことがあつという間に消えて勇氣百倍となり、最後の競り合いにも勝つことができた。

その後、私は日本大学に進学した。大学に入ってからの私の目標は箱根駅伝である。夏休みの前後にその選手登録会があり、二万メートルを全員で競い合うのである。「箱根駅伝での俺の活躍を見てもらうんだ。」と意気込んでいた私だったが、休み前の選手登録会では十七位であった。箱根駅伝に出られるのは、選手が十人、補欠が四人の計十四人である。これでは、大きな期待をもって送り出してくれた高校の先生や両親に申し訳ない。私は夏休みになって久々に実家に帰り、ゆっくりする間もなく、親類の家がある川治温泉に行つて、約一か月のトレーニングに入った。真夏の太陽が照り付け、全身は汗でびしょぬれになった。自分との戦い、孤独な日々の連続であった。それでも、箱根駅伝で走れることを夢見てトレーニングに励んだ。

そして、休み明けの九月上旬、二回目の選手登録会が行われた。私は一年生ながら一位になることができた。最後の箱根駅伝となる四年生のとき、各校のエースがそろって「花の二区」を走った。日本大学は圧倒的大差で、総合優勝を飾ることができた。

「万歳、やったあ。」

と、喜び合う声があちらこちらから聞こえてくる。私も皆と一緒に両手を挙げて喜びたかった。しかし、できなかった。四年生五人の中で、たった一人私だけが区間賞をとれなかったからだ。「よし、卒業後は、絶対に負

けないぞ。」と心に決め、翌日からトレーニングを開始した。そして、結果的にこの気持ちと練習の積み重ねがオリンピックへの道につながったのである。

十万人を超える大観衆の声援の中、同じ日本代表で入賞をされていた沢木さんに勝つことを目標に、私は走った。今までひたむきに努力してきた私にとっては最高の舞台である。両親の顔、恩師の顔、たくさんの顔が浮かんでくる。皆が私に声援を送ってくれている。私は、ナイター照明で鮮明に輝く走路を、ゴール目指して必死に走った。

結局、入賞はできなかった。しかし、私は、一度も勝てなかった沢木さんに、この晴れの舞台で初めて勝つことができたのである。沢木さん、ありがとう。今まで走り続けてきて、本当に良かった。

ばかりが佐藤さんの脳裏に浮かび、ただただぼう然と立ち尽くすことしかできなかった。

避難勧告が解除されると、同じ地区の住民は一人二人と自宅に戻り、避難所には佐藤さん一家しかいなかった。人の声も物音もしなくなった広い空間を見回すと、涙があふれてきた。人並みと思っていただけの生活は一変し、食事も風呂もままならない。涙の向こうには、暗く沈んだ家族の姿が目映る。

全てを失った佐藤さんは、もうどうでもいい気持ちでいっぱいだった。「もう、酪農はやめよう。今からばく大な借金をして再開しても、成功できるかどうか保証はない。」何度もそう思った。しかし、一方で、「ここで別の職業に就いたら、俺の今までの二十五年間は何だったのか。」そんな思いもあった。佐藤さんは悩み続けた。佐藤さんの長男である和幸さんもまた同じ悩みを抱えていた。酪農の後継者として、この四月から父親と共に働いてきた和幸さんにとっても水害の痛手は大きかった。牛も、家も、牛舎も全てを失った今、酪農をするより、別の職業に就いた方が楽なような気がした。重苦しい空気が佐藤さん一家にのしかかっていた。

今後どうしていいか。酪農を続けるか、それとも別の職業で生きていくか。不安と焦りの中で行われた家族会議。長い沈黙が続く。

佐藤さんは思い切った言った。

「このままで終わらせたくないんだ。俺にとって酪農は生きがいだから、他の道で生きていくことは考えられない。もう一度、一からやり直したい。協力してほしい。」
その日、和幸さんからの返事はなかった。

翌日、二回目の家族会議。和幸さんが言った。

「これから今まで以上に大変な生活になるだろう。でも、親父の思いを聞いて決心できた。今までの二倍以上の牛が飼えるよう頑張るから、俺にも手伝わせてくれ。」

まず、佐藤さんは、新しい牛舎をどこに建設するかという問題に悩まされた。生活を支えるため、一刻も早く牛舎を再建したい佐藤さんと、時間をかけても安全な場所で酪農をしたい和幸さんの意見は対立し続けた。しかし、別の場所に土地を買う資金はない。結局、流されてしまった牛舎の裏手の土地を選んだ。

水害の後、生き残った二十九頭の牛は知り合いに預けていた。十月下旬、預けていた子牛が死んだという知らせが入った。原因は川の水を飲んだことによる肺炎だった。預けている牛を少しでも早く引き取って自分たちの手で世話をしやりたい。佐藤さんも和幸さんも再建に向けて全力を挙げた。そして、一九九九年（平成十一年）一月、預けていた牛を仮設の牛舎に戻すことができた。五月には牛の数が八十頭になり、六月からは和幸さんも、本格的に酪農の勉強をするために、二年間のアメリカでの研修に旅立った。

二〇一三年（平成二十五年）八月。あの突然の水害から十五年。佐藤さんと和幸さんは、毎日酪農の仕事に精を出している。仮設の牛舎から再出発を決意し、将来は二百頭の牛を育てたいと語っていた佐藤さんの当時の夢は現実となり、現在では三百頭を超える牛を育てるまでになった。農場を切り盛りする和幸さんはこれま

での苦勞を振り返りこう語る。

「水害があったから今の自分があると今では思える。いつだって信念をもって仕事に打ち込む厳しい親父、水害から立ち上がるうとする強い親父は、常に俺の目標だった。だから水害という予測のできない天災に自分も負けてはいけなと思った。本気で酪農をやってみようと思ったんだ。酪農組合や家族の支えもなければここまで再建はできなかつただろう。酪農は生き物相手の待ったなしの仕事。だからおもしろい。酪農は俺の生きがい。自分が生かせる唯一の天職だ。これからもどんなつらいときでも家族と共に頑張つて生きていきたい。次の目標は五百頭だ。」

かつての大きな水害を乗り越えた佐藤さん一家。また次の新たな目標を胸に、力強く那須の大地を踏みしめている。



5 心をかたち

「お母さん、Kホテルに決定したの！」

「まあ、すごいね。でも、内気なあなたで大丈夫かしら。」

私の中学校では、進路学習の一環として五日間の職場体験学習がある。小さいときに、ホテルで働く女性が主人公のドラマを見てから、お客様のために一生懸命働き、感謝されるホテルマンにあこがれていた。だから私は、迷わずホテル業を希望した。私の住んでいる日光市にあるKホテルは、全国的にも有名な伝統と格式のあるホテルである。

体験当日の朝、ホテルの玄関の回転ドアを抜けると、担当の泉さんという女性が待っていてくださった。私は、緊張で思うように声が出ず、下を向きながら、

「おはようございます。よろしくお願ひします。」

そう言うのが精一杯であった。

「こちらこそ、よろしくお願ひします。挨拶は笑顔でね。まず、支配人から話があるので、こちらでちよつと待っていてください。」

私は、ロビーの椅子いすに腰こしかけ、ふと目を上げた。壁かべには、たくさんの宿泊台帳しゆくはくや写真しやくが飾かつてあることに気が付いた。ヘレンケラーやインシュタイン、ガンジー元首相など世界的に著名な人のものがたくさんあった。「うわあ、こんな人たちが宿泊したんだ。」

私は、不思議に思いながら見つめていた。

しばらくすると、泉さんが支配人を連れてこられた。

「おはようございます。今日から職場体験学習ですね。このホテルには、明治の創業以来、代々受け継つがれてきた大切な教えがあります。それは『自分の大切な人をもてなす気持ちで、お客様をもてなさない』ということです。五日間、頑張がんばってくださいね。」

その後、泉さんから仕事内容の説明を受けた。

「挨拶とお掃除そうじは、接客の基本です。相手にしっかりと気持ちが届くように挨拶をしてください。お掃除はただきれいにするのではなく、心を込こめることが大切です。」

毎日、時間を決めて玄関げんの脇わきでお客様への挨拶をするのが日課となった。

「いらっしやいませ。」

「ありがとうございます。」

私は、どうしても恥はずかしくて相手の目を見られず、伏ふし目がちになってしまい、相手に声が届かない。挨拶

拶のほかは、掃除である。玄関や廊下の掃き掃除、トイレの便器磨き、ロビーのテーブルや椅子磨きなど、ホテル内のいろいろなところを掃除するのである。たとえ汚れていなくても一通り行わなくてはいけない。最初は、きれいにしようとはりきってやっていたが、三日目には体中が痛くなってきた。挨拶と掃除が大切なことはわかるが、その繰り返し返しの日々に私の心は徐々に重くなり、あのテレビドラマのホテルマンを思い出しては、大きなため息をつくようになった。

あつという間に職場体験学習も最終日になってしまった。夕方、私はロビーのテーブルを拭いていた。そのとき、一人の女性が重い荷物を抱えながら、わざわざ私に話し掛けてきた。

「あなた、中学生ですか。」

「はい、職場体験学習をしています。今日が最終日なんです。」

「そうですか。昨日からあなたのことを見ていたんですけど、とつても熱心にお掃除を頑張っていましたね。温かい挨拶と隅々まで行き届いたお掃除、本当に気持ちがいいわ。働いていらっしやる皆さんが、お客様を大切に思う心をかたちにしてくださっているからですよね。本当にありがとうございます。今回はあなたのおかげです。きな時間を過ごせました。」

そう言って、玄関を出て行った。

「心をかたちに……」

その言葉が私の頭の中をぐるぐると駆け巡った。私は、はっとした。そして、思わず女性の後を追った。女性を乗せたタクシーは動き始めていた。

「ありがとうございます。」

私は、気持ちを込めて大きな声でそう言い、深く、いつまでもお辞儀をした。

気が付くと、泉さんが後ろに立っていた。

「もう体験学習終了時刻ですね。挨拶とお掃除の日々は、きつとつらかったですよ」

う。でも、それが私たちが大切にしている心なのです。どんなお客様にも気持ちよく過ごしていただきたいという切なる思いの表れなんです。あなたの思いもしっかり届いていたんですね。」

私は、泉さんの言葉を聞いて、うれしさと同時に恥ずかしさが込み上げてきた。そして、Kホテルに世界中からたくさんのお客様が訪れる理由もわかったような気がした。

「五日間、大変お世話になりました。本当に、ありがとうございます。」

自然と大きな声になっていた。私は、初めて、相手の目を見て自分の気持ちをしっかりと伝えることができた。

帰り道、自転車のペダルが軽く感じられた。私は、将来必ずすてきなホテルマンになろうと決意した。



6 十七才のキミへ

ラグビーが全てだった。

ラグビーがやりたくて、実家から電車で一時間かかる佐野高校へ入学した。二年生では、高校ラグーマン憧れの地「花園」でレギュラーとして出場し、次に目指したのは、高校日本代表の選手になることだった。

三年生になる春休み、佐野高校ラグビー部の主将になったばかりの石井と副将の私は、高校日本代表候補の登竜門となる合宿に呼ばれた。しかし、合宿の二日目、スクラムの練習中に、相手とのタイミングが合わず、最前列にいた私は、地面に頭から落ちた。気付いたとき、もう体は動かなかった。とにかく息が苦しい。

「頸椎損傷だ。首だ、首をやったんだ。動かすなよ。」

コーチの大声が聞こえた。このまま死ぬのか？水に濡れた芝生と土のにおいだけが唯一の感覚だった。

救急車で運ばれた病院で医師に最初に言われたのは、「一生車いすの生活を覚悟してほしい。」という絶望的な言葉だった。その事実を受け入れられない私は、

「早く練習に戻らなきゃいけないんだ！」

と、大声でわめき散らした。意識は以前と同じようにはつきりとしているのに、首から下の感覚が全くない。頭だけがベッドの上に存在しているかのようだった。悪夢以外の何ものでもなかった。自分に残された選択肢は二つ。舌をかみ切つて死ぬか、それとも生きるか――。

私は生きることを選んだ。「必ず治る。」と言い、感覚のない手足を毎日マッサージしてくれた父、悲しみを隠し笑顔で看病してくれた母、「全国大会の入場行進には必ず出場しろよ。」と励まし続けてくれたラグビー部の仲間たち、学校の先生方……多くの人たちに支えられていた自分。どんなことがあっても生き続けよう、そして

もう一度、必ずラグビーをやるんだ。その希望が私の心を強く支えていた。

高校卒業後、石井は早稲田大学に進学し、一年生からレギュラーの座をつかみ活躍していた。ともに練習に励んだ石井の活躍は、私の心の支えになっていた。高校の頃、毎日のように病院へ足を運んでくれた石井は、「頑張れ。」という言葉を一度も私に言ったことがない。大学進学後も、遠征先から絵はがきを送ってくれたが、いつもたいしたことは書いてなかった。イングランドと対戦する前日に送ってくれたはがきには、

「今、イギリスにいます。明日試合です。頑張ります。」

と、それだけ。お見舞いに来て、最後に握手をするだけで一言も話さないような無骨な男だ。けれども、一通のはがきは、どんな励ましの手紙よりも心にしみた。

怪我から三年以上の月日が流れ、石井は大学のスター選手になっていた。その頃の私は、必死のリハビリでどうにか松葉杖で歩けるようになり、入場行進こそできなかつたが、全国大会を観戦したり、高校に復学して卒業したり、小さな目標を少しずつクリアしていた。見守ってくれている人たちも、「吉田は強い精神力で回復した。」と喜んでくれた。しかし、私にとっては、もつともつらい時期だった。それは、「もう二度とラグビーはできない。」という現実を受け入れ、新しい生き方を探し出さなければならぬ時期にきていたからだ。しかし、これまで私を支えてきた「もう一度ラグビーをやる。」という希望をなかなか手放すことができなかった。

一九八七年（昭和六十二年）春、社会人ラグビーからたくさんの誘いがあったにもかかわらず、石井が決めた就職先は栃木県の教員だった。それは、日本代表のラグビー選手から一線を退くことを意味した。まだ二十三才。私の「なぜ？」の問いに石井はこう答えた。



「俺の原点は高校ラグビーなんだ。俺たちが過ごした高校時代のような体験を子どもたちにもしてもらいたい。」

ラグビーをやるといふ夢にしがみつき、次の一步を踏み出せない私に、「おまえもきつと新しい道が見付かるさ。」と石井が言ってくれているような気がした。

私はその後、アメリカの大学を卒業し、カメラマンの仕事に就いた。写真を始めたきっかけは、ラグビーの写真撮り始めたことだ。撮りながら、仲間と試合に出ている気分になれた。そして、だんだんと、写真の被写体は、戦闘による暴力や、津波や原発事故によって、ありふれた日常を失ってしまった人たちへと広がっていった。「震災後、家を流され、家族を失った人々は、協力して苦難を乗り越えていった。そして、日本中、世界中の人が被災地を応援した。私が怪我をしたときと同じで、最初はとにかく必死に生きるしかなかった。悲しいとか苦しいとか嘆いている暇はない。つらいのは一年を過ぎた頃から。失ったものを現実として受け入れ、新しい希望を探さなきゃならない。みんなに忘れ去られているんじゃないかという寂しさや焦りも感じるに違いない。」私自身の経験から、逆境にいたるときこそ、同じ時代と一緒に生きる友の存在が大切なんだ、ということを書真や文章を通して、人々に伝えたいと思っている。

数年前にインターネットに書き込まれた文章を見付けた。当時のラグビー部員ではない、クラスメイトだった男の文章だ。話したこともほとんどなく、顔も思い出せなかった。

「高校三年生になる春休み、緊急招集があり、『吉田が重傷を負った。もうたぶん歩けない……』と聞かされた。クラスの男たちが大泣きしていた。吉田は大きく、強く、静かな努力の男だった。人一倍努力し力強く前進していた。どんな強豪をも押し返す我らが高校の重量級フォワードのように。それがこんなことになるとは……。私はそのとき、努力することそのものに懐疑的になったほどだ。しかし、二十数年ぶりに偶然ネットで見付け

た彼は、私の軟弱な考えを自らの不屈の人生そのもので断固否定してみせていた。あの頃と変わらず、いやそれ以上にバカでかい男だった。涙が出た。」

学生時代を過ごしている若者たちに気付いてほしい。大切な宝物は、今何気なく過ごしている日常の中に埋もれているということ。クラス中の男たちが泣いてくれたことも、そんなふうに自分を思っていてくれたことも、当時の私は気付かなかった。気付かないだけで、友と呼べる仲間はいつも身近にいる。それが学生時代なのだ。

あの頃、十七才だった友へ。ずいぶん心配かけたね。本当にありがとう。これからも一緒に年をとろう。

十七才のオレへ。心配することはない。オマエの人生はずいぶん楽しいものだ。自由に世界を飛び回り、たくさんの友を得て、ふるさとは宝がある。迷わず前へ進むといい。

(注)

- ① 近鉄花園ラグビー場。全国高等学校ラグビーフットボール大会の会場としても有名で、同大会は「花園」という通称で呼ばれている。
- ② 首の骨が強い衝撃などにより変形・脱きゅう・骨折などを起こした状態。腕や下半身に症状が出ることが多い。
- ③ 物事の価値や意味について、疑いをもつこと。



7 「三・一一震災」を経験して

長く小さな揺れに続き、大きな衝撃が来た。

二〇一一年（平成二十三年）三月十一日午後二時四十六分。市貝町立市貝中学校の音楽棟。カタカタカタという小さい揺れが次第に大きくなる。「机の下、潜って！」先生が叫んだ。何が起きているのかわからない状況のまま、先生の指示に従い机の下に潜った。窓ガラスが割れる音、ホコリと風圧。先生が避難経路を確保に行った直後、黒板の上の天井が落ちた。響き渡る叫び声。余震が続き、蛍光灯が落ち、ひび割れた壁からは見慣れた外の景色が見えた。先生の「外に逃げなさい！」の声に押し出され、恐怖に押しつぶされそうになりながら、壁やガラスが次々と落ちてくる中、泣きじゃくる友達の手をぎゅつと握りしめ、校庭へと逃げた。空は青く、風が強く吹いていた。

あれから一週間。近隣の中学校では、授業が再開され、普通の学校生活に戻りつつあるという話が聞こえてくる。でも、美咲たちの学校は、時が止まったように、あの時のままだ。

「お母さん、いつまで家に待機していなくちゃいけないのかな？」
母は困ったような顔をし、

「何のために頑張ったのよ。地震のせいで、地震のせいで……。」

新年度になり、芳賀町が廃校となった小学校の校舎を提供してくれて、ひとまず授業は受けられるようになった。部活動も本格的に再開された。しかし、芳賀町から戻った後の練習で、朝の練習もできない状態だった。

芳賀町での生活にも慣れた五月、給食が再開され、教室に電気もついた。野ざらしだった自転車置き場にテントが張られた。美咲たちが芳賀町に通っている間に、市貝町の公民館敷地に仮設校舎が建設され始めた。

部活動は、市貝町が、修理の終わったトレーニングセンターやグラウンドを「中学生優先」と町民に呼び掛けてくれたので、全面的に使えるようになった。しかし、申請の手違いで、ラージボールをするお年寄りや、練習が一緒になってしまったときがあった。練習ができないのかとがっかりした瞬間、ある一人のおじいさんが、「中学生は校舎がつぶれて、大変な思いをしているんだ。皆さん、ここは中学生に譲りましょうよ。」

と言ってくれた。その声に合わせて「そうしよう。」という声が次々にあがった。週一回のラージボール。活動を楽しみにしているお年寄りが多く聞いていた。そんな貴重な機会を、美咲たちのために譲ってくださいなのである。帰り際には「頑張ってるね。」と優しく声を掛けてくださり、美咲は、涙が出そうだった。

夏休みの間に、仮設校舎が完成した。今度は、正真正銘、自分たちの学校、自分たちの教室だ。

仮設校舎での生活が始まって間もなく、学校に出掛けようとした美咲に母が話し掛けてきた。

「美咲、仮設校舎ができてよかったね。学校はどう？」

「プレハブだけだった以上に快適だよ。部活動も移動しないで思いつきりできるようになったし。」

「そう、よかったわね。来年は新しい校舎ができるからもつと良くなるわね。震災は大変だったけど、いろいろな人が、中学生のためにつて、手を尽くしてくれたおかげね。」

美咲の脳裏^{のうり}には、三月十一日の光景、そして、それからの日々が次々によみがえってきた。震災が起きたその瞬間の恐怖は、今でも忘れられない。でも、今こうして、毎日学校に通い、部活動も行うことができている。今は、一日一日を大切にしたいという思いが以前にも増して強くなった。そして、部活動がまだ思うようにできない被災地の中学生がいることも忘れてはいけなさと感じた。

「お母さん、行ってきます。」

「行ってらっしゃい。気を付けてね。」

今日も美咲は、プレハブの校舎に通う。空は青く澄み^す、さわやかな秋風が吹いていた。

(注)

① レクリエーション用に開発された新卓球。従来のボールより大きく、軽いボールを使用。



8 生命の輝きいのちかがや

「ただいま。」

僕は、玄関のドアを開けると吐き捨てるようにそう言った。そして、訳もなく足音をばたばたと立てながら自分の部屋に入ると、全ての荷物を床に放り投げてベッドに倒れ込んだ。

これが僕の最近の帰宅後のパターンで、寝転んだまま深いため息をつく頃には、母が、
「何なの、毎日毎日。」

と、イライラした声で階段を上がってくる。これをスタートの合図にして、母とのけんかが始まることもあるが、ここ二、三日は母と言い合いをするゆとりもないほど疲れている。

「あああ。ずうつとこうやって寝ていられたらなあ。」

新学期が始まって、夏休み気分を引きずる間もなく学校の授業が始まり、その上、日中は運動会の練習。そして、放課後は新人大会が近いということもあり、サッカー部の練習も遅くまである。

つい半年前まで小学生だった僕には、体力もまだ十分付いていないし、おそらくそれを補う精神力もない。こんなふうを考えているのは僕だけなのだろうか。

「そんなふうに、自分のために自分の体を思いつきり使ってくたくたになれるなんて、幸せなのにねえ。」

いつも不機嫌ふきげんそうに夕飯を食べている僕を見て、祖母がつぶやいたこともあるが、「おばあちゃんにはわからないんだよ。」と、つい憎まれ口にくをきいてしまったりするのだった。

本当に僕は何をするために生まれてきたのだろう。こんなふうに僕の人生は過ぎていってしまふのだろうか。『生きる』ってどういうことなのだろう。

そんなもやもやとした気分にいるときだった。学校の授業に、看護師さんが講話に来てくださることになった。僕は、毎日疲れた疲れたとはいうものの、意外と丈夫じょうぶで、滅多めったに病院に行くことはなかった。だから、看護師さんと聞いても、具体的にどんな仕事をされているのかはよくわからなかった。新しい職業について知ることができる。そんな気持ちで僕はいた。ところが、授業は担任の先生の、「今日は河野こうの先生のお話から、生命いのちとはどういうものか考えてほしいと思います。」という言葉で始まった。続いて河野順子先生が静かに僕たちの前に立って話し始めた。

普通ふつう、病院というところは、病気になる人をつとめる場所、正しく言うとな病気を治すお手伝いをするところなのですが、私の勤める日本赤十字病院の看護師にはもう一つ大切な仕事があります。それは、亡なくなった人の体をキレイにして御家族ごかぞくにお返しするというものです。

僕たち一人一人の顔をゆっくりと見ながら河野先生は、こうおっしゃった。

もう一つの大切な仕事って何だろう。僕は、「亡くなった人の体をキレイにして」という意味がわからなかった。しかし、河野先生の話を聞くにつれ、それがどういふことなのか次第にはつきりとしていった。それは僕の想像をはるかに超えた過酷な内容だった。

あれは、一九八五年（昭和六十年）のことです。群馬県の御巢鷹山に飛行機が墜落するという事故がありました。そのため、大田原赤十字病院にも救援の要請がきました。

現地に着いてみると、真夏のクーラーもない蒸し暑い体育館が仮設の病院になっていました。病院といても、飛行機事故ですからほとんどの方が亡くなっていますので、その亡くなった方々を一時的に安置しておく場所です。次々に運ばれてくるご遺体。五百人近くのほとんどが生前どんな方だったのか、わからないような状態でした。

ところが、そんな中で一人とても飛行機事故に遭ったとは思えないような無傷の小さな男の子の顔を見付けました。「よかった。」亡くなっているのにもかかわらず、無傷の体を見てほっとした次の瞬間、血の気がすうっと引いていくのを感じました。男の子の胸まで掛けられたシートをそつとめくると、そこから下にあるべき体がすっぱりと失われていたからです。

私はこの子に何もしてあげられない……。

一瞬、私の体は自分の無力さを責める気持ちと悲しみで包まれ、動かなくなってしまう。しかし、すぐに「この子を飛行機に乗る前と同じ体にしてご家族にお返ししなくては。」と自分を奮い立たせました。「三日も山の中にいて、痛かったでしょうね。」

私は、そう男の子に話し掛けながらダンボールで下半身を作り、再びシートをかぶせました。

教室中がしんと静まり返っていた。クラスの全員が河野先生の話にくぎ付けになっていた。

僕は、体が熱くなるのを感じた。次に、胸がしめつけられるような感じに襲われたが、心臓のドキドキという音が次第に大きく聞こえだし、僕はやっと落ち着きを取り戻した。

今まで「死」というものをこれほど強く感じたことがあっただろうか。そして、何より僕は、人間の生命というものは、これほどまでに大切にされるべきものなのだということを全身で感じていた。

僕は今まで「生命」というものについて、真剣に考えたことがなかった。呼吸をして、食事をして、友達とおしゃべりして、部活動をやって、親とけんかして……。日常生活でごく自然にやっていたことが、二度とできなくなるのが「死」であるということに改めて知ることができたのだ。そして、そう思ったら、今ここにいる自分の体が、生命が、とてもいとおしく思えてきた。最近感じていた疲れや投げやりな気持ち、行き場のない怒りだって、この生命があるからこそ味わえるものなのだ。

外を見ると、真夏の暑い日差しの中、真っ赤な顔をして数名の男子がサッカーをしていた。それは、いつもの光景なのに、なぜかとてもキラキラと輝いて見えた。

※日本航空機墜落事故について

一九八五年（昭和六十年）八月十二日午後六時五十六分過ぎ、羽田発大阪行き日本航空ジャンボ機（ボーイング747型）一二三便が、群馬県多野郡上野村の御巢鷹山山頂に激突した。同機には、乗員、乗客合わせて五二四人が搭乗していたが、奇跡的に生存していた女性四人を除き、五二〇人が死亡。単独機の事故としては、史上最悪の惨事となった。

9 三個の小石 — 僕の田中正造研究 —

市立図書館に行った帰り、郷土博物館に寄ってみた。佐野の郷土博物館には小学校のときにクラスの人々と来て以来だ。中庭にある田中正造の堂々とした像が印象的だった。

実は今、総合的な学習の時間で郷土の歴史について調べているところだ。それぞれに自分の課題を見付けて、研究を進めることになっている。そこで僕は田中正造を選んだ。僕の住んでいる小中町には、田中正造の生家が残っている。だから、何となく親しみがあつたのだ。

閉館間際だったせいか、特別展示室にはほとんど人影がなかった。一組の親子連れがいるだけである。幼い男の子が物珍しそうに手前のケースを見つめていた。(何があるのかな?) 僕もつられて目をやった。すると、そこには小石が三個。どこにでも転がっていきそうな普通の石である。しかし、見れば「遺品」と書かれている。解説を読んでみた。田中正造が息を引き取ったとき、枕元にはいつも持ち歩いていた愛用の袋が置かれていたという。その中に日記や聖書に混じってこの三個の小石があったそうだ。正造は石を集めるのが趣味だったらしい。それにしても、こんなちっぽけな石ころのどこにひかれたのだろう。

その日から、いよいよ僕の田中正造研究が始まった。まずは伝記から。じっくり読んでみると、思いがけない出来事に興味を引かれる。

例えば、自伝にはこんな話が紹介されている。正造が数えて五歳のある晩のこと、人形の顔を描いて得意そうに奉公人に見せたところ、「あまりお上手ではありません。」と正直な答えが返ってきてしまった。正造はかかんんに怒って「だったら自分でかいてみる。」と筆を押し付けた。しきりに謝る奉公人をいつまでたっても許さない。見かねた母のサキが彼をなだめるが、それでも言うことをきかない。すると、母のほうもずいぶん気性の激しい人だったらしい。なんと、正造を家の外に放り出してしまったのだ。彼は夜、しかも雨でずぶ濡れになりながら、二時間あまりも泣き続けてやっと許してもらったことができた。普通の家では考えられないことだろう。さらに不思議なのは、この出来事を振り返って正造は、母を恨むどころか深く感謝さえしているのだ。

また、父親との間にはこんなやりとりがあった。三十八歳のとき、正造は政治への道を決意する。しかし、それには父の許しを得なくてはならない。自分の財産を全て公共のために役立て、そのためには子どもたちともいずれ別れることを書面に記した。それを父の富蔵に差し出してはみたものの、正造は内心不安だった。年老いた父がそんな途方もない考えを受け入れてくれるかどうか。まして名主のリーダー格である父には、政治の難しさがよくわかっていた。おそらく首を縦に振ってくれないだろう。正造は覚悟していた。ところが、それを読み終えた富蔵は笑顔でその志をほめ讃えたばかりか、あるお坊さんの歌を紙に書いて正造に手渡した。

死んでから仏になるはいらぬこと

生きているうちによき人となれ

正造は生涯、この日のことを忘れなかった。その後の彼の業績については広く世間に知られている通りであ

る。足尾銅山鉍毒事件で農民とともに戦ったこと、天皇陛下に直訴したこと、谷中村が遊水池になるのに反対したこと。そして、自然破壊や環境汚染が深刻な現在、正造はますます注目を浴びている。僕たちにとっては文句なしに郷土の誇りであり、歴史上の人物である。

しかし、一方ではこんな疑問も浮かぶのだ。はたして正造自身はそんな自分をどのように見ていたのかと。今の僕たちが考える偉人の人生と、田中正造が実際に歩んだそれとでは少し違うような気がするのだ。そこで僕は彼の日記をたどってみた。正造は熱心に日記をつけている。その中にこんなことが書かれているのを発見した。一九一二年（明治四十五年）二月二十六日、他界する一年ほど前のものである。

【現代語訳】私は数十年間、石を愛してきたが、その愛する道を知らなかった。ただ形だけを愛した。これは山や川の形を愛して、その後で石の形を愛するようになったからだろうか。しかし今回、黒羽より大中二個の石を猪熊氏に送った。その石は形は良いのだけれど、質が悪い。本質を愛さないで、外見だけにとられるのは私の石と同じだ。私は今になってはつきり形だけのものに価値がないことに気が付いた。人間についてはすでに知っていたが、石についてはそのことに気付くのが遅かった。

僕と思う。正造が三個の小石を大切に持ち歩いていたのは、そこに自分の生き方を重ね合わせたからに違いない、と。つまり、外見ではなくその本質を重視したのだ。僕には、彼の熱い思いが今も小石のなかに脈打っ

ているように思えてならない。あの小石は、渡良瀬川の川原から正造が発した現在の僕たちへのメッセージなのではないだろうか。

だとすれば、僕たちは田中正造を単なる過去の偉人としてとらえるべきではない。今も郷土に生きる一人の人間として受け止めることもできるはずだ。病の床からの次のような言葉に耳を傾けることが、僕の正造研究の第一歩ではないかと考えている。

「正造はな……天地とともに生きるものである。天地が減れば正造もまた減びざるを得ない。今度正造が倒れたのは、安蘇、足利の山川が減びたからだ。―日本も至るところ同様だが―。ゆえに見舞いに來てくれる諸君が、本当に正造の病気を治したいという心があるならば、まずもってこの破れた安蘇、足利の山川を回復することに努めるがよい。そうすれば正造の病気は明日にも治る……。」

(注)

① 他人の家に仕え働く人。

② 村の代表者。

【現代語訳】の原文 予、数十年、石を愛してその道を知らず。予はただ石の形を愛せり。これ山川の形を愛するよりにして、しまいに石の形を愛せしものか。しかるに今回、黒羽より大中石二個を猪熊氏に送る。その石、形はよろしいけれども、質悪し。質と性を愛さずして、形に片寄りするものは、予の石のごとし。予はここにおいて断然、形のみの価値なきをさとりぬ。人においてはすでにこれをさとる久し。石において遅かりし。

那須岳を水源とする那珂川は、関東随一の清流として知られ、自然が多く残されている。そのため、アユ、サケ、ウナギをはじめとする豊かな生物を育てている。特に、アユは日本一の漁獲量を誇り、解禁日の六月一日からは県内外より大勢の釣り人でにぎわい、那珂川の風物詩となっている。

夏休みに入り、孝志、健太、光一の三人は、大好きな那珂川に釣りに出掛けた。

「今の時期はウグイが釣れそうだね。」

「ウグイもいいけど、コイが釣れると最高なんだけどなあ。」

「コイが釣れたら、みんなに自慢できるね。」

三人は、川に向かいながら、釣りの話題で盛り上がっていた。

那珂川に着くと、川の音が心地よく聞こえてきた。水面はキラキラと輝き、川底まではっきりわかるくらい、水が透き通っている。その中を小さな魚の群れが横切る。三人は、早速、釣り針にえさを付けた。そして、川のすぐそばまで行き、竿をしながら、釣り針を遠くに投げ入れた。



しかし、今日はなぜか当たらない。何度も釣り針にえさが付いているか確認し、投げ入れるを繰り返した。暑さはさらに厳しくなり、竿を持つ手がやけどしそうなくらいじりじりしてきた。

「釣れないね。今日はあきらめようか。」

三人は、一匹も釣れないもどかしさと暑さのため、イライラしてきた。

そのとき、孝志の目の前を、大きな魚が下流の方へ泳いで行った。

「おい、健太。コイだ。見たかい。」

「うん。あれは大きいぞ。三十センチメートルはあるんじゃないか。」

「追い掛けてみようよ。」

三人は、竿を持ったまま、コイが泳いで行った下流へと急いだ。

「あんな大物は滅多にお目にかかれないよ。」

「釣りたいね。」

孝志たちは、大きなコイに興奮した。そして、コイを見失わないように川岸を進んでいった。

すると、三人の目に看板の文字が飛び込んできた。

「ここから下流150メートルの区域は、魚の保護のため禁漁区になっています。」

那珂川では、魚を捕ることを禁止している禁漁区を設定し、水産生物資源の保護をしているのである。



孝志は、戸惑いながら、二人に声を掛けた。

「ここからは魚を捕ることが禁止になっているぞ。どうする？」

三人はお互いの顔を見合わせていたが、健太が小さな声で答えた。

「せっかく見付けたんだから、少しの時間だけ釣ってみようよ。それに、今日は釣り人が少ないから、釣りをしても、僕たちのことには誰も気付かないよ。」

「そうだね。一匹ぐらい釣っても魚の数が減るわけではないさ。孝志も釣ろうよ。」

健太と光一の誘いに、孝志は「う、うん。」と迷いながら返事をしたが、えさを付けている二人を見て、孝志も釣りの準備を始めた。

三人が、釣り針を投げ入れようとしたときだった。突然、後ろの方から声がした。

「おーい、君たち。そこは魚を捕ってはいけない場所だ。」

振り向くと、土手の上に腕章を付けたおじさんが立っていた。那珂川を管理している漁業組合の人だった。孝志は、額から汗が流れ落ちるのを感じた。漁業組合のおじさんは、三人のいる所に来ると静かな口調で語り掛けた。

「最近、那珂川で、釣りや水遊びをする人々が増えてきて、とても喜んでいるんだ。でも、その人たちがきまりを守らずに自分勝手な行動をすると、魚の数が少なくなり、大切な那珂川の資源が失われてしまう。そうなれば、訪れた人が釣りや水遊びを楽しむことができなくなってしまうんだよ。それに、きまりを守ってこそ、

釣り上げたときの喜びも大きくなるんじゃないかな。」

先程まで心地よく聞こえていた川の音が、孝志には全く聞こえなかった。漁業組合のおじさんの話だけが何度も何度も頭の中を巡っていた。三人は一言もしゃべらずに元の場所に戻っていった。

夏休みが終わりに近付いているというのに、相変わらず強い日差しが照り付けている。孝志たち三人は、その後も、ときどき那珂川に釣りに出掛けていた。

「今日も、たくさんの釣り人が来ているね。」

「そうだね。あ、孝志、引いてるぞ。」

孝志はあわてて竿を上げた。釣った魚は十五センチメートルのコイだった。しかし、孝志は、そうつと、川に戻してあげた。

「二十センチメートル以下のコイは戻してあげるきまりだからね。」

孝志はきっぱりと笑顔で言った。健太も光一も、孝志の様子を見て笑顔で応えていた。

三人は、緑の山々、青い空、真っ白な入道雲が広がる大パノラマの中、釣りを続けた。水面は一層輝きを増し、その上を吹くさわやかな風が優しく孝志たちを包んでいた。

(注)

① 多くの川に生息する比較的小型の淡水魚。



II この子たちに輝く場を

炎天下で、したたる汗をぬぐい、草を刈る園生たち。真冬になると、凍えつく中で石を拾い、落ち葉を集める。そして、たい肥を作り、それを背負って急斜面を這い上がり、葡萄の木を育てあげる。

① 指定障害者支援施設「こころみ学園」は、一九五八年（昭和三十三年）、当時中学校の特殊学級の教員だった川田昇さんと生徒たちが、二年がかりで平均斜度三十八度という急な斜面の山、三ヘクタールを開墾したことから始まった。創設者の川田さんは、一九二〇年（大正九年）に生まれ、二十五歳になる一九四五年（昭和二十年）に終戦を迎えた。太平洋戦争で、血の凍るような恐怖の中、結核を患い、命の危険にさらされながら、ほどなく内地送還された。国を守るために戦った仲間たちの多くが亡くなった中、自分は生きて残っているというのに、申し訳ない気持ちでいっぱいになった。「生き延びたこの命を、誰かのために精一杯捧げよう、とにかく悔いのない人生にしたい。」と思い、戦後、学校の教員に戻った。

すると、そこには、授業についていけないために、おどおどしている子どもたちがいた。それは、いくら勉強してもできなかった幼い頃の自分の姿に重なった。「この子どもたちと一緒に歩いて行こう。自分ができることを精一杯やっていこう。」と心に誓った。そこで川田さんは、私財を投じ借金もして、栃木県足利市に山を購入し、葡萄畑を造り、当時中学生だった子どもたちと葡萄の栽培を始めたのである。それが施設を造るきっかけとなった。栽培する作物として、葡萄やその数年後に始めた椎茸を選んだことには理由があった。一つは、山の斜面を使って手足の機能を訓練するため、もう一つは、地元の農家の方から、椎茸栽培の指導を受けるこ

とができたためである。施設周辺は、地場産業として椎茸栽培が盛んな地域であった。当時、椎茸栽培に必要な原木を得るための山林は、荒廃していた。そこで園生は、植林、間伐、下草刈りなどの仕事を通し、山を荒廃から救う担い手となった。そして、このことは、彼らにとって、働きながら生きがいを見付ける道筋にもなっていた。

「こころみ学園」には、じつとしていられなかったり、沈黙したままだったりする子どもたちがたくさんいる。当時、こうした障害のある生徒が義務教育を修了した後に働く場所が少なく、このような子を抱えた親たちは、子どもの就職先や将来のことで悩む人も多かったが、ここで救われた人たちがたくさんいた。

川田さんは「こころみ学園」を設立するとき、目標としたことが四つあった。一つ目は、職員と子どもたちの間で差を付けないこと。職員も子どもも同じ物を食べ、同じ宿舎に住むのである。二つ目は、自然の中での質素な生活を大切にすること。作業の後の食事のおいしさ、暑さや寒さに耐えた後の涼しさや暖かさ、疲れに耐えた後の休息の喜びや眠る喜び。「我慢ができる教育」の重要性を感じていた川田さんは、これらのことを、集団の中で、実際に体験させることにより、生きる喜びを取り戻させたいと考えたのである。三つ目は、労働を大切にすること。働くことは物を作るだけでなく、人の心もつくる。子どもたちは、葡萄に袋かけをしたり、椎茸の原木をひたすら運んだりするなど、それぞれの障害の程度や能力、適性に合った役割の仕事を繰り返していく



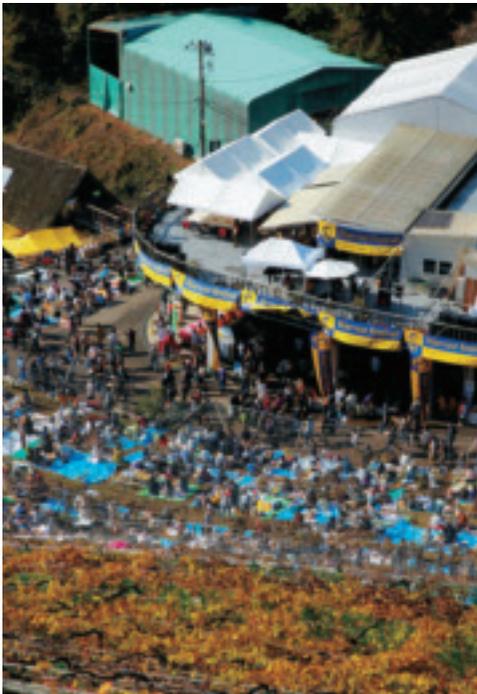
中で、自分の仕事に誇りをもつようになり、一步一步ゆつくりと、成長していったのである。そして、四つ目は、地域との協力体制を大切にすること。「こころみ学園」ができた頃、一日の労働を終えて葡萄畑から施設に帰る途中の園生たちが、農作業をしている地域の人たちに、

「おばちゃん、大丈夫？」

などと声を掛け、自分が疲れているにもかかわらず、手伝う姿が見られた。地域の人たちは、
「いつもありがとうね。」

と声を掛けていた。この様子を川田さんは、ほほえましく見ていたのだという。このように園生たちは、自然に地域の人たちとの絆を育み、施設も地域に受け入れられていったのである。「こころみ学園」は、障害のある人が地域社会から助けられるばかりでなく、地域の人を助け、お互いに支え合う関係を築いていったのである。その後、一九八四年（昭和五十九年）にはワインの醸造が始まった。そして、二〇〇〇年（平成十二年）の「九州・沖縄サミット」では、「こころみ学園」で造られたスパークリングワイン「NOVO（ノボ）」が晩餐会に華を添え、高い評価を得ることになる。また、地元への貢献も高く、年に一度開催される収穫祭は、二〇一三年（平成二十五年）には、三十回を数える。今や二日間で一万五千人近くの人が訪れるまでになっている。

「こんなにもたくさんの方がここに来て、ワインを楽しそう



に飲んでいる……。こんな日が来るとは、夢にも思わなかった。」

と川田さんが生前、収穫祭のときに、うれしそうに話していたことを、娘さんが語ってくださいました。そして、「彼らはもう、どんなこともやり抜く勤勉な一人の青年であり、自信に満ちた、物言わぬ誠実な農夫になった。」

と、満足そうに語っていたという。

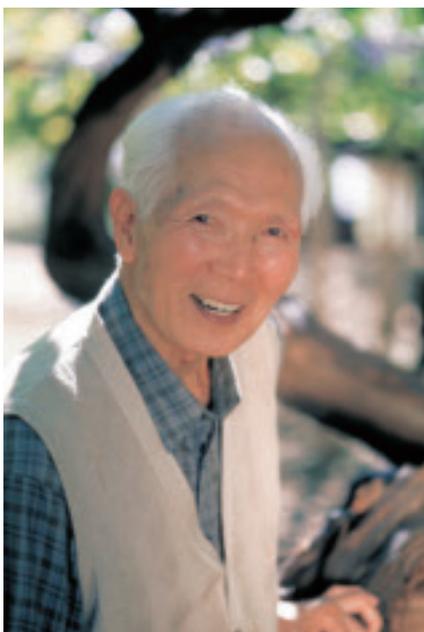
現在も、この「こころみ学園」には、およそ一五〇名の園生たちが額に汗し、黙々と作業に取り組んでいる。そのうち半分の園生が、六十歳を越えた年齢となった。

葡萄や椎茸を育てる園生たちの仕事は、それぞれが自分にふさわしい楽器を手にして奏でるハーモニーに似ている。「こころみ学園」の園生たちは、川田さんの意志を受け継ぎ、今日も作業を続けている。園生や施設で働く人たち、地域の人たちと、互いに助け合いながら。そして、支え合いながら。

(注)

① 指定障害者支援施設は、障害者自立支援法に基づき、利用者（障害者）に対して、施設障害福祉サービスを提供する施設。

② 現在の特別支援学級



12 コタンの高橋医師

北海道の白老町は、太平洋の大海原と砂丘を一望にする町でした。古くからアイヌの人たちが多く住み、コタン（集落）をつくっていました。彼らの地アイヌモシリは、明治になって北海道と命名され、本格的な開拓が始まったのでした。

「銀のしづく降る降る……」という言葉で知られる『アイヌ神謡集』（知里幸恵編）の序には次のようにあります。

「その昔この広い北海道は、私たちの祖先の自由の天地でありました。……平和の境それも今は昔、夢は破れて幾十年、この地は急速な変転をなし、山野は村に、村は町にと次第次第に開けていく……」

（大正十一年三月）

一九二二年（大正十一年）三月、北海道庁は白老村にアイヌの人々のための病院を設立。初代の院長として高橋房次医師を招きました。房次は医学専門学校卒業後、軍医（日露戦争）や警視庁の検疫委員を経験。その



後青森県・北海道の各地の病院で勤めて白老に来たのです。病院は木造平屋建てで、病室二（六ベッド）のほか診察室そして居間兼宿直室があるだけでした。当時の白老のコタンの戸数は九十戸。人口はおよそ四二〇人程でした。アイヌの人たちは漁業・農業などをして暮らしていました。アイヌの人たちの暮らしや伝統文化を見せる観光も始まっていました。

病院長となった房次が最初に考えたことはアイヌの人たちの健康状態の調査でした。一軒一軒コタンの人たちの家庭を訪問し、家族の状況や健康状態を調べていきました。その結果いろいろなことがわかりました。カムイ（神）に祈ることを大切にしてきたコタンの人々。様々な病気に苦しむ人々。昔、えぞ地と呼ばれた北海道は伝染病の無菌地帯でした。明治になって和人との交流が広がるにつれ、伝染病に対する抵抗力のないアイヌの人々の間に、病気にむしばまれる人が多く出てきたのです。しかもアイヌの人たちは、病気だけでなく、偏見と差別によって傷付けられていました。

医者は、単に技術や薬品を売るのではなく、内面的な苦悩まで取り去ってやるのだという信念を房次はもっていました。だから調査の間に一人一人の心をつかむことを忘れませんでした。また、次のようにも考えていました。

「尊い人命をあずかる医療が一個人の営業であってはいけな。当然国費として、貧しい人も富める人も差別なく平等に受けられるようにすべきである。」と。

このことは白老に赴任した一九二二年（大正十一年）頃から、熱っぽく説き続けていたのでした。

往診に出掛けるときは、黒かばんをさげ、歩いて、時に自転車で行きました。困っている人からは治療費を受け取りませんでした。治療費を受け取らないばかりか、「カバンの中がいっぱいになったので。」「いただきものの菓子だが子どもにあげて。」と言って、さり気なく手渡すのでした。一九三二年（昭和七年）からは、開拓村の人々も診るようになりました。白老の町から十四キロほど離れた森野という村へ週二回、夏は馬車、冬は馬ぞりで行くのです。

房次は、特にリユーマチや神経痛の名医として知られていました。道内各地から治療を受けに来た人たちの一人が次のように語っていました。

「まず一番に感じることは、一つの待合室に仕切りもなく、アイヌの人たちも和人も同じ患者として雑談しながら待っていることでした。畳の部屋に、たくさんの患者が仲良く待っているのには驚いたり感心したり、信じられないほどの光景でした。なぜなら道内の開業医はアイヌの人たちと和人を区別し、別々の部屋で待たせていたからです。しかもアイヌの患者は土間のような下座で、和人は畳の部屋。あきらかな差別を感じますが、当時はこれが習慣でもあったのです。だから、分け隔てなくみんな同じ部屋に座っているのに感激しました。世の中には人間を差別しないお医者さんがいることを私は初めて知りました。」

白老町は、古くから住むアイヌと昭和の初めに開拓民としてやってきた和人とが住む町でした。この地で、

一九二二年（大正十一年）以来、四十年余りを医者として活躍した高橋房次先生を、町の人たちはいつまでも忘れないようにと、碑を立てています。

高橋房次先生は明治十五年栃木県下都賀郡間々田町に生まれた。

アイヌ人の医療はもちろん一般村民の衛生思想の普及啓蒙に専念し、全町民に対し貧富の別なく医療費等を度外視し、精魂の限りを尽くした……

（昭和三十四年）

一九六〇年（昭和三十五年）六月二十九日。房次は七十九歳の命を閉じました。コタンの人たちとともに白老町が喪に服し、お通夜から告別式まで、多くの人々が訪れました。七月一日の町葬の列は延々四百メートルも続き、白老町始まって以来の盛大なお葬式になりました。一千余人が房次を見送ったのでした。

故郷小山市間々田にいる母が、常に房次に言っけて聞かせていた言葉そのままに、「恵まれない人々に尽くす。」ことを生涯貫いたのでした。

（注）

- ① アイヌ語で「人間の大地」という意味。
- ② アイヌの人たちが本州から来た人たちをさす言葉。アイヌ語では「シサム」（隣人という意味）

13 「茂中の森」の下草刈り

「茂中の森」というのは、茂木町のシンボルである城山の南面を、茂木中学校が学校林としている森のことです。

一九七七年（昭和五十二年）に創立三十周年の記念事業として造成し、一九七八年（昭和五十三年）三月に桜の苗木を五百本植樹しました。以後、毎年、茂木中学校の全校生徒と保護者や地域の方々が力を合わせ、桜の木の根元の草を刈り、桜の名所として町内外の人々から親しまれている森です。

今日は六月十五日、土曜日。「茂中の森」の下草刈りの日だ。

「勇介、早く起きなさい。今日は下草刈りでしょう。ご飯食べて、支度をしなきや遅れてしまうでしょう。」

「そんなに慌てなくても、間に合うよ。」

「何言ってるの。もう直人は出掛けたのよ。」

「母さん、初めて下草刈りをする直人と一緒にしないでよ。」

「でも、聡君はさっき家の前を通って行ったよ。私もすぐ出掛けるから……。」

母の声に追い立てられるように、勇介は玄関を出て集合場所に向かった。

集合場所の城山の駐車場ちやうしやじやうに着くと、もうほとんどの人は来ていて、先生が出欠を確認かくにんしていた。勇介は二組の最後だった。すでに来ていた聡たちは、今日集まる人たちが使う草刈りの道具を手際てぎわよく準備していた。

いよいよ作業開始。分担場所に移動してみると、例年に比べて草が少ない。勇介は、聡と一緒に手前から草を刈り始めた。勇介は「これならすぐに終わるな、今年は楽だ……。」と独り言を言いながら、慣れた手付きで草を刈っていた。次第しだいに蒸し暑むくなってきたりとした汗あせが目にしみてくると、草を刈る手も休み休みになってくる。周りを見てみるとちよつと離れたところでは、弟の直人が慣れない手付きで必死に草を刈る姿が目映った。その隣となりでは、母が黙々もくもくと作業している。休憩きゆうけいの合図が聞こえたときには、勇介が分担した場所はほぼきれいになった。

気が付くと聡が見当たらない。「聡、休憩だよ。どこにいるんだ。」と声を掛けながら周りを見渡すと、聡は、下級生の分担場所に入って、アドバイスをしながら、一緒になって草の多い急斜面きゆうしゃめんを刈っているのだった。勇介は聡に声を掛けた。

「おい聡、休憩だぞ。」

聡は、勇介に向かって手を挙げて「わかった。」という合図を送りながらも、なかなか作業を止めない。



「おい。休憩だぞ。」

勇介は聡にもう一度声を掛けた。

急斜面の草が刈り終わると、聡はようやく勇介のところに来てきた。

「今年は、やけに頑張っているじゃないか。」

「そうか？まあ、今年は三年生だからなあ。」

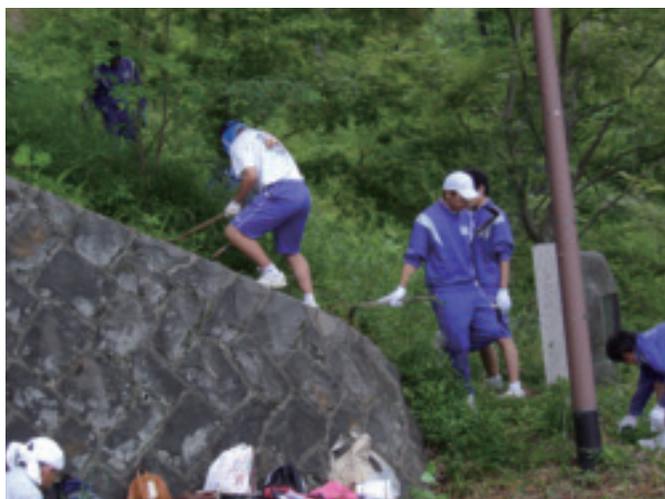
「三年生？」

「勇介はどうして下草刈りが始まったのか知っているか？」

聡は勇介と休憩場所に向かいながら、話し始めた。

「実は、今年の四月に僕の家ほくに叔父さんおじが来て、二人で城山の桜を見に行つたんだ。そのとき、こんな話をしてくれた。この城山に桜の苗木を植えたとき、叔父さんは茂木中の三年生だったそうだ。地面が硬かたくて支柱が入ら

ず苦労したことや、苗木に掛ける水はドラム缶かんで運んで、空き瓶びんに分けて掛けたりして苦労したことを聞いたんだ。急斜面で足場が悪い上に岩が多いため、一年生がけがをしないように気を配りながらの作業は大変だったそうだよ。その後、桜の木が大きく育つように下草刈りが始まったというわけさ。叔父さんは満開の桜を眺ながめながら、『今年も見事に咲いたなあ。見てごらん。みんなにこにこしながら花見を楽しんでいる。「茂中の森」は地域の宝だ。毎年、茂木中の生徒が地域の人たちと一緒に下草刈りを続けてくれるおかげだよ。』とうれしそうに言っ



てくれたんだ。僕たちは茂木中の生徒として、一人一人が森を大切にしていかななくちゃいけないんだよ。特に僕たち三年生はね。」

休憩場所に着くと、保護者の方が冷たい水を持ってきてくれた。聡が「おいしいなあ。」と言いながら水を飲んでいて。聡の表情は満足そうに見えた。

そのとき、

「みなさん、ご苦労様です。三年生は分担場所がきれいになりましたので終了しゅうりょうとなりますが、二年生の分担場所があと少しで終わるので、もうしばらく待っていてください。」

という先生の声が聞こえた。勇介は、少し考えて残っていた水をぐつと飲み干すと、聡に、

「じゃあ、手伝ってくるか。」

と声を掛けた。

全ての草を刈り終えて、集合場所に戻ってきた。勇介も聡も、顔中汗まみれになっていたものの、心地よさを感じていた。山を下りながら聡は、

「来年の桜の花が楽しみだな。」

と言った。勇介は桜が満開になった「茂中の森」を思い描くえがのだった。



14 あるサッカー選手の決断

「ピッ、ピッ、ピー。」

「試合終了。栃木県グリーンスタジアムに、黄色い紙吹雪が舞い上がりました。この瞬間、栃木SCのJ2への昇格が決まりました。おめでとう、栃木SC。」ラジオから、喜びを伝えるアナウンサーの声と歓声が聞こえた。

二〇〇八年（平成二十年）十一月十六日、そのとき私はビニールハウスの中にいた。「よかったな。」私は一人つぶやくと、ハウス越しに、初冬の澄みきった青い空を見上げた。そしてまた、赤く育ったイチゴの収穫を続けた。

私の夢は、プロのサッカー選手になることだった。

幼い頃からボールを蹴ることが好きだった私は、地域のサッカー少年団に入りたくて、小学三年生になる日を指折り数えていた。入団後は、足が速かったこともあり、フォワードの選手としてたくさんのゴールを決めた。中学生のときには、地区の選抜選手にも選ばれ、高校と大学は、サッカーの名門校に進学した。

かつて両親は、「家族の一員なんだから、将来は農家を継いでくれ。」と言っただけだったが、いつしかサッカー



に打ち込む私の一番のサポーターになってくれた。両親だけじゃない。監督やコーチ、チームメイトなど、たくさんの方が私を支えてくれた。気が付けば、「プロのサッカー選手になる。」という私の夢は、自分だけの夢ではなく、実現しなければならぬ使命のように感じていた。

二〇〇四年（平成十六年）大学を卒業した私は、栃木SCの入団テストを受け、合格した。当時の栃木SCは、JFLというリーグに所属していて、まだプロのサッカー選手はおらず、昼間は、学校の先生など、別の仕事をしているアマチュアの選手ばかりだった。私も昼間は、実家でイチゴの栽培をしている両親の手伝いをして、夜や週末は、サッカー選手としてチームのJ2昇格を目標に活動してきた。

故障でシーズンを棒に振ったこともあった。チームの方針で、慣れ親しんだポジションも変わらなければならぬこともあった。それでも私は、不思議と次々に力が湧いてきて、努力を続けることができた。

そして、栃木SCの選手となって三年が過ぎ、やっとチームとプロ契約を結ぶことができた。夢がかなった瞬間だった。しかし、私の夢は、これで終わりではない。私は、これまでに以上に、練習や試合で必死にボールを追い掛けた。

プロとして迎えた初めてのシーズンは、先発や交代出場などで、多くの試合に出場するこ



とができた。しかし、チームは十八チーム中の八位に終わり、この年もJ2への昇格は、かなわなかった。私は、何よりも応援してくれるサポーターに申し訳ない気持ちでいっぱいであった。

「来シーズンこそは、絶対にJ2へ。」と、チームやサポーター、そして県内全体が、さらに盛り上がりを見せる中、私は、チームから自由契約の提示を受けた。自由契約とは、どのチームとも自由に契約交渉をしてよいという権利が得られる意味だが、言い換えれば、このチームでは、もうサッカー選手としては次のシーズンを迎えることができないので、進路は自分で決めてくださいということだ。これは、プロスポーツの世界では、仕方がないことである。幸い私には、いくつかのチームから、移籍の誘いがあった。しかし……。

私の実家は、イチゴ農家だ。私はこの四年間、両親の手伝いをするだけではなく、時間を見付けては、地域の若い農家が集まる学習サークルに参加し、農業技術や経営について学んできた。そこで、私を慕ってくれる仲間ができたり、自分なりに施した工夫の数々が、イチゴの粒の大きさや収穫量、味などに成果として表れ始めたりしていた。そのような中で、遠くのチームに移籍し、実家を離れたらイチゴ栽培はどうなるのか。学習サークルの仲間や地域の農業はどうなるのか。私を支え続けてくれた両親も、もう高齢だ。

考えた末、私は二〇〇七年（平成十九年）のシーズンを最後に、ユニフォームを脱ぐことを決めた。

J2昇格を伝えるラジオ中継が続く中、ふと気付くと、ハウスの外に後輩が来ていた。

「栽培用のビニールポットなんです。先輩はどうしてですか。教えてください。」

「残念。それは教えられないよ。企業秘密だから。」

「そんなあー。先輩が頼りなんですから。」

「うそ、うそ、今度一緒に調べてみよう。」

彼は、近所で農業を営んでいる後輩だが、学習サークルと一緒に学んでいる仲間であり、夜にはフットサルで共に汗を流しているチームメイトだ。この頃はこうして、栽培技術の相談によくやってくる。

実際、イチゴづくりにおいては、かつてのビニールハウスから、鉄骨とガラスで作られたハウスになったり、暖房や水やりなどの設備が自動化され、収穫用のロボットも開発されたりするなど、技術はどんどん進歩している。さらには、栃木県で開発した新品種「スカイベリー」の栽培が始まるなど、勉強が必要であるとともに、若い私たちへの期待も大きい。また、努力次第で結果につながる点では、サッカー選手と同じであり、プロとしての努力を惜しまずにはいられない。

やりたいと思うことをやりたいだけやらせてくれた両親のため、私を慕ってくれる後輩や仲間のため、おいしいイチゴを楽しむにしているお客さんのため、そして、技術がますます進む農業の未来を担うため、私には、挑戦のしがいのある舞台が目の前にたくさんある。そんな私は、本当に幸せだと思う。



15 ねずみ観音かんのんの思い出

日本中に見られる、カマボコ型をした体育館。その構造を発明したのは栃木県出身の建築家、野澤のさわ一郎いちろうさんだ。彼は農家の長男だったが家を継つがずに工業の分野に進んで成功した。東京で大企業だいの経営者けいぎやうとして忙しい日々を過ごした彼だったが、家族と故郷をこよなく愛すとともに、家族と故郷に特別な思いをもっていた。

野澤一郎さんは、旧制真岡まおか中学校（現在の真岡高校）を卒業後、東京の工業学校に学び、後に自ら会社おとを興し、鉄骨建築工業の発明によって一代で大企業を築いた人物である。彼は経営者として社員に厳しいことで有名であったが、我が子わがこに対してもことさら厳しい人物であった。そんな彼も、晩年、故郷のねずみ観音の木立こだちを見るたびに涙なみだしたという。それはこんな思い出があるからだ。



一郎は、父亀吉と母ヨシの長男として生まれた。一郎が生まれてまだ間もない頃のこと。幼い一郎を背負い、ヨシは実家の重病の親を見舞った。ヨシは長らく患っている亀吉のためにと、実家からどじょうを譲ってもらい、家に帰る途中だった。いつも通り慣れた、わずか数キロの道であったが、どこでどう間違ったものか、道に迷い、ヨシは昼少し前から夕方までさまよい歩いてしまった。家で待っている亀吉のことが気に掛かるし、背中の乳飲み子も心配である。初めて授かった男の子で、ヨシは一郎を目の中に入れても痛くないほどかわいがっていた。自分一人ならまだしも、このまま迷い続けたらと思うと、ヨシは気が気でなかったという。

そうこうしているうち、一郎がぐずり出してしまった。それに気をとられた拍子に何かにつまずいてヨシは転んでしまった。その途端、一瞬にして風景ががらりと変わり、気が付いてみるとそこは見慣れたねずみ観音の木立の前だったという。そのとき、持っていたどじょうの数は四分の一にまで減っていた。ヨシはこの出来事を後々まで「キツネに化かされたが、一郎がぐずったおかげで助かった」とよく語っていたものだった。しかし、本当にどじょう欲しさにキツネが化かしたものか、それとも心労のあまり曲がるべきところを曲がり損なって迷っただけなのかは、定かではない。

けれども、そんなことがあったとしても不思議ではない程、その頃のヨシは不安だったに違いなかった。一番の働き手である亀吉は病に伏しており、実家の養蚕や赤ん坊の世話、その他家事一切を自分の手で行わねばならなかった。おまけに、実の親まで重病で、実家はさびれつつあった。後に、一郎さんの事業が成功を収め東京に移り住んでからも、ヨシがねずみ観音の話をする度に、一郎さんの胸は痛んだ。

一郎さんの会社は数々の発明でさらに発展を遂げた。しかし、彼は戦争で最愛の息子を失ってしまった。かけがえのない一人息子ではあったが、苦難の道を与えることが親の務めと信じていた彼は、息子にわがまま一つ言わず、ぜいたく一つさせず、厳しいばかりで一度たりとも褒めることをしなかった。息子は大学で機械を学び、会社を継ぐべき立場にあり、内地の安全な場所で勤務する兵であった。当時、一郎さんの会社は、軍の協力工場として重要な仕事をしていたので、その気になれば息子を最前線に送らずに済む方法はいくらでもあった。しかし、息子は、一度は行かなければ話にならないと言い、友人が次々と出征していくのに自分だけがそれでは一生苦しむことになるかと親を説き伏せて、ただ爪と髪だけを残して南方最前線に向かつて行ったのだ。一郎さんは、息子が戦場から帰還したら、今までの文句は全て方便で、実は百点満点の息子であったと素直に認め、精一杯褒めてやろうと心に決めていたのだが、最前線で命を落としてしまった。一郎さんの後悔は絶えることはなかった。

社長の座を退いた後、一郎さんは故郷に足を運ぶことは滅多になくなったが、亡き母ヨシの霊前で手を合わせる度に、ねずみ観音の話を思い出したという。母校に自分の会社の設計による体育館を寄贈したときも、校歌の作詞を手がけ、「ねずみ観音にほど近く」という一節を読み込んだほどであった。ヨシがキツネに化かされたというねずみ観音の小さなほこらは、今でも一郎さんの故郷で静かにたたずんでいる。



とちぎの子どもたちへの教え 人として、してはならないこと、すべきこと



5つの教えで育もう！とちぎの子どもたちの豊かな心

「教える育てる道徳教育」指導資料
ふるさと とちぎの心
栃木県道徳教育郷土資料集（中学校編）

平成26年3月発行
〒320-8501 栃木県宇都宮市埴田1-1-20
栃木県教育委員会事務局学校教育課

TEL 028-623-3392

FAX 028-623-3399

この資料集は、学校で何年間も使うものです。次の年に使う人のことを考えて、大切に扱いましょう。



いきいき栃木っ子3あい運動

学びあい、喜びあい、はげましあおう